

# 「聞く」ということ その2

## — 聞く姿勢を育てる —

研究開発部 矢口みどり

### 1. 「聞く姿勢」は、「聞く姿勢を表現すること」で育つ

「聞く」ためには、相手に「聞いている」ことを伝えることが重要だということ、そしてその「聞いている」ということを伝えるためには、「聞く姿勢」を持つことが重要だということ、前項で述べた。相手は何を話したい（あるいは話したくない）のか、どういう気持ちでいるのかをつかみ、それを受け止めようとする姿勢を持つことが大事だということである。

では、そうした姿勢はどうしたら育つのか。それには、「聞く姿勢になる」という経験をする必要がある。「行動したことができるようになる」というのが、脳の学習の原則\*だからである。

学習者を、相手の話を聞く、相手の気持ちを受け止める、理解するという場において、そのための行動をとらせる。つまり、聞く姿勢を表現する行動をとる、ということである。

### 2. 聞く姿勢になる — 学習活動 ①

「聞く姿勢になる」という経験とは、どうしたらできるだろうか。いろいろなやり方があるのだが、ここでは会話事例を使い、その中の役を分担して演じ、その気持ちを想像しながら考えさせるという方法を紹介しよう。前掲の失敗事例を使ってやってみよう。まず、事例1。

#### 《課題》

夫は何か妻に相談されたのである。どうしたら「聞くよ」「聞いているよ」ということを伝えられるか。話の内容がわからないので考えにくいかもしれないが、少なくとも身体的表現はできるはず。また、言葉ではどう表現できるか。夫役と妻役を分担して演じた後、それぞれの気持ちについて話し合ってみよう。

#### 《学習の展開》

事例通りに演じた後の話し合いから・・・

A：妻の立場からいうなら、まず、目を開けて妻の顔を見てほしいわね。

B：妻の話に合わせて、うなずくとか、返事するとかね。

C：難しい話って言ってるじゃない。すぐには返事できないんじゃないかな。

——皆は、聞かれてすぐに返事ができないときって、どうするの？（指導者）

A：首をかしげるとか、腕を組むとかかしら。

——今考えているんだということは、どうしたら伝わるかな？（指導者）

D：「うーん、そうだな～」とか・・・。「すぐには答えられないな～」とか言う。

B：「難しいなあ。少し考える時間がほしいな」と言ってくれば、気持ちは伝わると思う。

C：話の中身がわからないから、考えにくいな。その先どう言ったらいいか、わからない。

——じゃあ、話の内容を引き出すにはどうするか。考えてみよう。（指導者）

- A：聞いてみたらいいんじゃないの？「もう少し、説明してくれない？」とか。
- C：内容が出てくれば「そこはどうなっているの？」とか「それはどういうこと？」とか聞いてみる  
ことができる。
- D：「君はどう思ってるの？」と聞いてみるのはどう？
- A：「どうしてそう思うの？」と聞いてくれるのもいいわ。そうすれば、話の内容を説明する展開になるし、  
それに対して、夫の気持ちや考えも聞くことができるわね。

と、このような展開になる。もう一つ、事例2についてやってみよう。

### 3. 聞く姿勢になる — 学習活動 ②

#### 《課題》

子どもに相談があるといわれた母親は、料理の真っ最中である。料理の出来栄えにとって重要な時間  
帯だ。しかし、子どもも急いでいるらしい。どのように話したらよいだろうか。

これも同じように、子ども役、母親役を分担して考える。その立場で考え、その気持ちを伝えあうことで、  
相手の気持ちを受け止めつつ、自分の状況を伝える手立てを工夫しよう。

子どもの状況、母親の状況を具体的に設定しておけば、リアルな展開になる。

#### 《学習の展開》

- A：いきなり「後にしてくれない」というのはまずかった。
- B：明らかに料理優先の姿勢を表現してしまったからね。
- 子どもに対して聞く姿勢を表現するとともに、自分の事情も伝えるようにすることはできないか。
- D：「急ぐの？ 少し待てる？」と聞くのはどうか。
- B：それはいい。余裕があるなら子どもは「どのくらい？」と聞いてくる。そうしたら時間の相談になる。
- C：「待てない」と言ってきたら？
- A：それは子どもにとっては緊急問題だと考えなくてはいけないね。
- D：どのくらい緊急なのかを確かめる必要があるんじゃないか。
- C：それには内容を聞く必要がある。でも料理はどうする。
- 子どもには、何よりも子どもの話を聞くことが重要だと思っているということを伝えつつ、自分の状  
況も伝えるということはどうか。
- A：「待てない」と言っているんだから、あまり言い訳をしていると、失敗例みたいになってしまう。
- C：でも、子どもにも相手のことも考えなくてははいけないということは、わからせたい。
- A：年齢によりけりだね。
- C：日常の子どもの状況を見ていれば、それは判断できるのではないか。
- A：それもそうだが、そのときの子どもの状況をよく見る必要があるのではないか。落ち着いて言ってい  
るのか、動揺しているのか。動揺しているようなら、料理どころじゃないでしょう。
- B：確かに。いくら料理にとって重要な時間といっても、それにはちゃんと対応しなくてはいけない。

D：落ち着いているなら「このお料理がまっ黒になって食べられなくなっちゃってもいいと思うほど、重要な問題なのね。それなら、すぐに相談に乗るわ」と言ってはどうかな。

A：それはおもしろいね。子どもは親が自分のことを第一に考えていてくれるって思えるし、料理のことも伝えられる。子どもの問題がどの程度の問題かもわかる。」

一人では、考えつかなくても、グループの誰かが思いつけば、それをヒントにして、いろいろな意見が出てくる。指導者が、その状況を見て質問したりアドバイスしたりすることにより、聞く姿勢のイメージがはっきりしていく。聞く姿勢を表現するという行動を通じて、だんだん聞く姿勢が育っていくのである。そしてまた、聞く姿勢が育つことによって、表現の仕方のレベルも上がっていくのである。

これは第一段階である。まず、このようにして文章で書かれたものでゆっくり考えるところからスタートし、だんだん現実のコミュニケーションに近づけていく。実際のコミュニケーションでは、相手の話を耳で聞いて、その場ですぐ対応できなければならない。映像を活用すれば、相手の一言を聞きそれに対応するという場もできる。テーマや話し手聞き手の条件を設定して、学習者同士で会話をすることもいい。日常生活には会話場面がいろいろあるので、これもぜひ活用するといい。TV ドラマの中の会話を記録に取り、グループでどこに問題があったか、どう改善するかなどを考えてみるのも面白い。

「話す」ということについても同じように考えられる。これについては、また稿を改めて書きたい。

JADEC ニュース 83 号(2013.3)「コミュニケーション学習を考える」加筆修正